

26年度自己点検評価報告書 個別表

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 1111

大項目	I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(1)-1 適時適切な収集

【年度計画】

各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ確かな情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。

(東京国立博物館)

日本を中心として広くアジア諸地域の文化の体系的陳列を目指し、絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料の中から重点的に購入する。

担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長 富田 淳
------	------------	-------	---------

【実績・成果】

- ・購入件数 9件 内訳：絵画3件、書跡1件、漆工1件、東洋染織4件
- ・決算額 139,686,000円

26年度は、絵画3件「柿本人麻呂像」・「融通念仏縁起絵断簡」・「桜下美人図」、書跡1件「関戸本古今和歌集切」、漆工1件「花卉漆絵片口」、東洋染織「スレンダン(肩衣)茜地草花文様緯緋浮紋織」・「頭巾 紫地段幾何文様浮紋織」・「帯 茜地段幾何文様浮紋織」・「スレンダン(肩衣)茜地段幾何文様浮紋織」の計9件を購入した。

【補足事項】

- ・絵画の「柿本人麻呂像」は、中国の隠逸文人を源泉とする「維摩居士系」に分類されるもので、中世にさかのぼる数少ない作例の一つである。中国風のモチーフと和装の人物をあわせた特異な画面を有し、美術的、資料的な価値が極めて高い。
- ・書跡の「関戸本古今和歌集切」は、春の歌を装飾料紙に揮毫した極めて価値の高いものである。
- ・漆工の「花卉漆絵片口」は、朱漆で描かれた文様と、注ぎ口や高台の形状が安土桃山時代の特徴を示しており、中尊寺などの奥羽地方に伝わる、いわゆる秀衡碗の中では、時代の遡る作例である。
- ・東洋染織の「頭巾 紫地段幾何文様浮紋織」は、スマトラ島の特色である金糸浮紋織の中でも、バリエーションに富んだ様々な幾何文様が細密に織り出された優品である。



[購入品]花卉漆絵片口

【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
収蔵品件数	116,268件	—	—			113,258	113,897	114,362
うち国宝	87件	—	—		87	87	87	87
うち重要文化財	634件	—	—		629	631	631	633
購入件数	9件	—	—		4	0	5	5

【年度計画に対する総合評価】

評価：B

【判定根拠、課題と対応】

総合文化展の充実に寄与する貴重な作品が購入できた。

【中期計画記載事項】体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。

(東京国立博物館)日本を中心にして広くアジア諸地域にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

【中期計画に対する評価】

評価：B

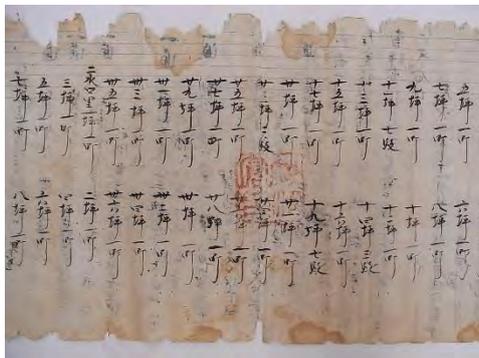
【判定根拠、課題と対応】

中期計画に基づき順調に成果をあげている。

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(1)-1 適時適切な収集							
<p>【年度計画】</p> <p>各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ的確な情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>京都文化を中心とした絵画、彫刻、書跡、陶磁器、染織品、漆工芸品、金工品、考古資料、歴史資料の中から重点的に購入する。</p>								
担当部課	学芸部列品管理室	事業責任者	室長 浅見龍介					
<p>【実績・成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 購入件数 9件 内訳:絵画2件、金工1件、漆工5件、染織1件 決算額 227,452,000円 <p>今年度は、近年新たに発見された藤末謙初の「仏涅槃図」、室町幕府の同朋衆芸阿弥に水墨画を習った祥啓の「鍾秀斎図」(重文)、加賀藩家老前田家に伝来した有線七宝の名品「七宝唐花文手付盆」、中世の蒔絵手箱の好例「千鳥蒔絵手箱」、桃山時代の高台寺蒔絵様式による「桐違鷹羽蝶紋蒔絵筆筒」、類例の少ない江戸時代の刺繍による「紅縹子地松竹梅鶴花車文様繡掛下帯」といった京都文化を物語る良品を購入することができた。</p>								
<p>【補足事項】</p> <p>予算を確保できなかった昨年度より候補作品の選定作業を進め、今年度特別に配分された購入予算を加味し、諸々の事情に照らして優先順位の高いものを選び、購入の手続きを進めた。</p> <p>右に写真を掲載したのは祥啓筆「鍾秀斎図」。祥啓は建長寺の画僧で、京都に来て室町幕府の同朋衆芸阿弥に絵を学んだ。東国の水墨画の隆盛は祥啓に始まる。京都文化を東国に伝えた人として重要である。</p>								
								
[購入品]重要文化財 鍾秀斎図 祥啓筆 玉隠英瑛等賛								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
収蔵品件数	7,109件	—	—		6,584	6,621	6,708	6,721
うち国宝	27件	—	—		27	27	27	27
うち重要文化財	180件	—	—		177	177	179	179
購入件数	9件	—	—		23	13	1	0
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 国指定品を含めた高水準の作品の購入を進め、収蔵品の欠落部分の一部を補うことができた。							
<p>【中期計画記載事項】体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。</p>								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 京都文化を研究・展示するのに効果的な作品を収集することができた。							

【書式A】

施設名 奈良国立博物館処理番号 1113

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(1)-1 適時適切な収集							
【年度計画】								
各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ確かな情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。 (奈良国立博物館)								
仏教美術及び奈良を中心とした絵画、彫刻、書跡、工芸品、考古資料、歴史資料等の中から重点的に購入する								
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長	野尻 忠				
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> 購入件数 15件 内訳：彫刻2件、絵画4件、書跡1件、金工4件、漆工1件、考古3件 決算額 261,960,000円 								
購入により15件の文化財が新たな収蔵品として加わった。 木造如来立像、銅造光背、絹本着色春日宮曼荼羅、絹本着色釈迦十六善神像、愛染明王像印仏、最勝曼荼羅、天永二年十一月二十一日 東大寺注進状案、金銅火焰宝珠形舍利容器、金銅能作性塔、金銅蓮華形磬、金銅都五鈷杵、愛染明王彩繪舍利厨子、人面付蓮華文鬼瓦（八島廃寺出土）、伝奈良県葛城市出土品（銅製骨藏器）、伝滋賀県根本如法堂付近出土品								
【補足事項】								
<ul style="list-style-type: none"> 彫刻の木造如来立像は、貴重な平安時代（10-11世紀）の一木彫像で、奈良にゆかりのある品と推定され、当館の所蔵品として相応しい。 彫刻の銅造光背は、小品ながら完形品の稀少な平安時代（12世紀）の遺品であり、名品展をはじめ様々なテーマでの展示に活用できる。 絵画の絹本着色春日宮曼荼羅は、中世に広く製作された春日宮曼荼羅のなかでも13世紀に遡る数少ない遺品として、奈良に立地する当館の所蔵品として相応しく、名品展や特別陳列での展示ができる。 絵画の絹本着色釈迦十六善神像は、縦170cm超の大画面を有する奈良伝来の仏画であり、展示効果の大きさが期待される。 書跡の天永二年十一月二十一日東大寺注進状案は、紙背の「遠江倉印」が特に注目され、行方不明文書の再発見としての意義も大きい。 金工の金銅火焰宝珠形舍利容器は、これまで館蔵品になかったタイプの舍利容器であり、名品展での多様な舍利荘厳の展示に活用できる。 金工の金銅能作性塔は、能作性珠を具備する極めて貴重な異例であり、火焰宝珠形の形も他に例を見ない。展示効果の大きさが期待される。 考古の人面付蓮華文鬼瓦（八島廃寺出土）は、人面を瓦の文様に採用する日本では珍しい遺品で、名品展での瓦展示の多様化を図れる。 								
								
【購入品】 天永二年十一月二十一日東大寺注進状案 紙背 部分								
【定量的評価】								
項目	26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
収蔵品件数	1,877件	—	—	経 年 変 化	1,827	1,831	1,834	1,862
うち国宝	13件	—	—		13	13	13	13
うち重要文化財	111件	—	—		109	109	111	111
購入件数	15件	—	—		7	4	2	3
【年度計画に対する総合評価】				【判定根拠、課題と対応】				
評価：B				判定根拠：仏教美術及び奈良に関わる文化財を分野に偏りなく収集できた。				
【中期計画記載事項】								
体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 (奈良国立博物館)								
仏教美術及び奈良を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。								
【中期計画に対する評価】				【判定根拠、課題と対応】				
評価：B				判定根拠：仏教美術を中心にバランスの取れた収蔵品蓄積が図られている。				

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(1) -1 適時適切な収集							
【年度計画】 各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ確かな情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。 (九州国立博物館) 日本とアジア諸国との文化交流を中心とした美術、考古及び歴史・民族資料等の中から重点的に購入する。								
担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長 富坂 賢					
【実績・成果】 ・購入件数 14件 内訳：絵画 4件、書跡 1件、彫刻 1件、漆工 1件、染織 3件、考古 2件、歴史資料 2件 ・決算額 727,228,000円 当館のテーマである日本とアジア諸国との文化交流の足跡を示す作品を収集する一方で、日本の王朝文化を象徴する作品として、優れた文化財を 14 件購入した。								
【補足事項】 ・14 件を購入した ・絵画分野では、狩野永徳の大作「紙本墨画松に叭叭鳥・柳に白鷺図 六曲屏風 狩野永徳筆」が特筆される。代表作「花鳥図」(国宝、京都・聚光院所蔵)に酷似し、祖父・元信の端正な図様を継承しつつ、新時代の豪壮な様式を予感させる優品である。 ・書跡分野では、「藍紙墨書大方広仏華嚴経卷第十五(泉福寺焼経)」を購入した。金箔を散らした藍色の料紙に『大方広仏華嚴経卷第十五』を书写した、12 世紀の装飾経の優品である。 ・彫刻分野では、平安時代・10 世紀の「阿弥陀如来坐像」を購入した。 ・染織分野では、琉球の第二尚氏時代・19 世紀に制作された女性の上着「黄地松皮菱繫ぎ檜扇団扇菊椿文紅型胴衣」など、東アジアにゆかりの作品を購入した。 ・漆工分野では、「龍鳳彫彩漆合子」を購入した。官製銘をもつ中国明時代嘉靖期(1522-66)彫彩漆の典型作である。 ・考古分野では、縄文時代・亀ヶ岡文化の「伝青森県つがる市森田町床舞出土 長胴異形壺形土器」などを購入した。 ・歴史資料分野では、「紙本墨画徳川家康御内書」が特筆される。『宗家文書』(当館所蔵、重要文化財)の一部にかつて含まれ、その後散逸した古文書のうちの 1 通で、文禄・慶長の役後の講和交渉の推進を、徳川家康が宗義智に指示したものである。 ・いずれも、日本と大陸あるいは九州と本州の文化交流を物語るもの、あるいは時代の美意識や工芸技術の高さを示す優品といえる。								
								
[購入品]紙本墨画松に叭叭鳥・柳に白鷺図 六曲屏風 狩野永徳筆								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
収蔵品件数	512 件	—	—	経 年 変 化	433	453	474	493
うち国宝	3 件	—	—		3	3	3	3
うち重要文化財	29 件	—	—		28	29	29	29
購入件数	14件	—	—		31	17	18	15
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 「松に叭叭鳥・柳に白鷺図 六曲屏風」などの国立博物館として収集すべき作品と、文化交流を端的に示す作品とを、バランスよく収集した。							
【中期計画記載事項】体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 (九州国立博物館)日本とアジア諸地域との文化交流を中心とした、美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 文化交流を端的に示す作品を、バランスよく収集した。							

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 1121

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(1) -2 寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用							
【年度計画】 (4館共通) 1) 寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。								
担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長 富田 淳					
【実績・成果】 1) ○寄贈 ・新規寄贈品件数 100件 内訳：絵画3件、書跡11件、彫刻1件、金工14件、漆工1件、考古6件、東洋金工1件、東洋考古62件、東洋民族1件 ○寄託 ・新規寄託品件数 604件 内訳：絵画86件、書跡26件、彫刻104件、金工6件、刀剣3件、陶磁4件、漆工16件、染織217件、考古12件、歴史資料4件、東洋絵画22件、東洋書跡15件、東洋彫刻20件、東洋金工4件、東洋陶磁55件、東洋漆工8件、東洋考古2件 ・寄託品は新規に604件を受け入れ、59件を返却した。								
【補足事項】 ○寄贈 ・作品の寄贈については11名の所蔵者から、100件の文化財を受け入れた。 ・彫刻の寄贈品のうち、「押出如来立像」は飛鳥～奈良時代の典型的な押出仏の遺品であり、保存状態の良さからも価値が高い。 ・漆工の寄贈品のうち、「桔梗蒔絵螺鈿聖龕」は現存する類例の少ない携帯用の聖龕で、安土桃山時代の輸出漆器の特徴を良く示している。 ・東洋考古の寄贈品のうち、「双耳壺」は保存状態の良い優品で、青い釉薬も鮮やかな仕上がりで、展示効果が高い。 ○寄託 ・作品の寄託については6機関2個人から、604件の文化財を新規に受け入れた。 ・寄託品のうち、国宝は絵画1件、書跡1件、彫刻1件の計3件、重要文化財は絵画4件、書跡1件、彫刻1件、陶磁1件、漆工2件、考古12件、東洋書跡3件の計24件となり、総合文化展の充実と研究に大きく寄与しうる。								
								
[寄贈品] 押出如来立像								
【定量的評価】項目								
	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
新規寄贈品件数	100件	—	—		23	151	63	471
寄託品件数	3,064件	—	—		2,726	2,689	2,563	2,519
うち新規寄託品件数	604件	—	—		5	7	3	20
登録美術品件数	25件	—	—		3	3	2	23
【年度計画に対する総合評価】 評定：B				【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：総合文化展と研究に寄与する内容の寄託を受けることができた。				
【中期計画記載事項】 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B				【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：中期計画に基づいて順調に成果をあげている。				

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(1)－2 寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用								
【年度計画】 (4館共通) 1) 寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。									
担当部課	学芸部列品管理室	事業責任者	室長 浅見龍介						
【実績・成果】 1) ○寄贈 ・新規寄贈品件数 379件 内訳：絵画49件、書跡17件、金工56件、陶磁86件、漆工161件、染織7件、考古3件 ○寄託 ・新規寄託品件数 162件 内訳：絵画122件、書跡18件、彫刻5件、金工9件、陶磁4件、漆工3件、染織1件 ・新規受入件数では昨年度より倍増した。これは、中国絵画のまとまったコレクションを受託できたことによる。天野山金剛寺の重文「大日如来坐像」と重文「不動明王坐像」は、同寺本堂の改修期間に合わせて借用しているもので、圧倒的な存在感の丈六仏であり、26年9月にリニューアル・オープンした名品ギャラリーの顔ともなった。									
【補足事項】 ○寄贈 ・寄贈は379件で、寄贈者は14人であった。 ・絵画で寄贈された長澤蘆雪筆「人物鳥獣画卷」は、近年見いだされた蘆雪初期の作品で、主題・描法の多彩さ、機知に富む画面構成、大巻であること等から初期の代表作に位置づけられる。特に卷子作品はこれまで晩年作2点しか知られておらず、蘆雪の画業研究の上でも貴重である。 ・絵画44件、書跡16件、金工56件、陶磁85件、漆工161件、染織1件、考古1件の計364件の寄贈者は、大阪府貝塚市で江戸時代から続いた商家であり、土蔵に伝わる文化財の悉皆調査を当館に依頼の上、寄贈候補品の取捨選択を一任された。内容は、初期狩野派による「扇面貼交屏風」、酒井抱一筆「梅に鶯・椿に雀図屏風」、司馬江漢筆「富岳遠望之図」、河鍋暁斎筆「梅に鳥」、重要美術品の豊臣秀吉筆「消息」、柴田是真作「青海塗菓子銘々盆」、中山胡民作「富士蒔絵盆」、小島漆壺斎作「七宝花菱唐草鮫鱈棗」、各種茶碗、茶入、茶杓などの茶道具、近代竹工の名品、御所人形のコレクションなど多岐にわたり、幕末近代の関西圏における豪商の生活を支えた物質文化の全容を示す。寄贈を前提とした調査は来年度も続く予定である。 ○寄託 ・新規寄託の文化財には、上述の天野山金剛寺の重文「大日如来坐像」と重文「不動明王坐像」をはじめ、個人から重文「太刀 銘備中国住人左衛尉直次作／建武二年十一月」など、多数の指定文化財が含まれている。天球院の重文・狩野山楽・山雪筆「竹虎図襖」「梅遊禽図襖」の寄託は寺坊でデジタル複製の襖に入れ替えての原図保存のためであり、博物館が担うべき文化財保存の役割にかなっている。 ・返却した寄託品は53件である。									
									
[寄託品]大日如来坐像と不動明王坐像									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
新規寄贈品件数		379件	—	—	変化	35	24	86	13
寄託品件数		6,001件	—	—		6,005	6,013	5,914	5,892
うち新規寄託品件数		162件	—	—		107	93	73	70
【年度計画に対する総合評価】 評価：A		【判定根拠、課題と対応】 文化庁との連携により、大型彫刻の長期寄託が実現し、平常展で注目を集めた。個人から大量の寄贈を受け、収蔵品を大幅に充実させることができた。							
【中期計画記載事項】 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。									
【中期計画に対する評価】 評価：A		【判定根拠、課題と対応】 寄贈・寄託とも、質・量のいずれかにおいても従来の実績を大幅に上回り、たいへん順調に推移した。							

【書式A】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1123

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(1)ー2 寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用							
【年度計画】 (4館共通) 1)寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。								
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長 野尻 忠					
【実績・成果】 1)○寄贈 ・新規寄贈品件数 0件 ○寄託 ・新規寄託品件数 7件※1 内訳は下記のとおり 彫刻 3件：重要文化財 木造菩薩面 2面 重要文化財 木造行道面 蠅払 1面 重要文化財 木造舞楽面 皇仁庭 2面 ※1 重要文化財 乾漆虚空蔵菩薩半跏像 1軀 絵画 1件：最勝曼荼羅 1幅 工芸 3件：重要文化財 秋草松喰鶴鏡 1面 木造黒漆六角厨子 1基 金銅鬼面五鈷杵 1口 ※1 彫刻「重要文化財 木造舞楽面 皇仁庭 2面」は、既に寄託されている作品1件に点数の追加としたため、下記定量的評価項目の寄託品件数26年度実績値には含めない。								
【補足事項】 ○寄贈 ・26年度は文化財寄贈の申入れがなかった。 ○寄託 ・彫刻分野の寄託品のうち木造舞楽面 皇仁庭は、墨書銘から平安時代の長久3年(1046)の作とわかる貴重なもの。名品展「珠玉の仏教美術」で26年9月7日まで展示した。 ・絵画分野の寄託品である最勝曼荼羅は、縦3m以上に及ぶ大幅で、興福寺における祈雨法要に使用された本尊画像の一遺例。現存例が極めて少ない点でも本品は貴重だが、さらに墨書銘から製作経緯が判明する点も重要。26年12月9日～27年1月12日に名品展「珠玉の仏教美術」において陳列した。 ・工芸分野の寄託品である秋草松喰鶴鏡は、白銅色を呈する鑄銅鏡で、鏡背の文様は萩、女郎花、薄という秋草の描写の間に、水辺に立つ鶴と松の小枝を加えて飛ぶ鳥を配する。高い鑄造技術、華やかな文様構成は、平安時代後期の鏡の中でも類まれな優品であり、展示への活用が期待できる。								
								
[寄託品] 木造舞楽面 皇仁庭								
【定量的評価】								
項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
新規寄贈品件数	0件	—	—	年 変 化	8	0	1	25
寄託品件数	1,984件	—	—		1,947	1,945	1,951	1,994
うち新規寄託品件数	(※1) 7件	—	—		6	12	13	49
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 新規寄託件数は、前年度比マイナスではあるものの23・24年度とは同程度であり、かつ、すぐに平常展に出陳しており、順調と言える。							
【中期計画記載事項】 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 新規に寄託を受けた最勝曼荼羅1幅は、すぐに名品展で陳列しており、積極的な活用が図られている。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(1)－2 寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用								
【年度計画】									
1) 寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。									
担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長 富坂 賢						
【実績・成果】									
1) ○寄贈 <ul style="list-style-type: none"> 新規寄贈品件数 5件 内訳：金工1件、考古3件、民族資料1件 ○寄託 <ul style="list-style-type: none"> 新規寄託品件数 12件 内訳：絵画9件、書跡1件、彫刻2件 									
【補足事項】									
○寄贈 <ul style="list-style-type: none"> 5件の寄贈があった。 金工分野では、15世紀インドネシアの密教法具「金剛鈴」があげられる。 考古分野では、北部九州の素封家に伝わった、古墳時代の出土品を主体とする3件の寄贈があった。とりわけ、豊前地域の有力首長墓からの出土例が知られる金銅装馬具、金銅装単龍環柄頭付大刀、全国的に出土例が稀少で九州では唯一の青銅鈴釧など、古墳時代の日本と朝鮮半島との交流を物語る優品は特筆される。また、東南アジアでは、土器や青銅器を中心とする、タイの紀元前後のバンチェン文化やカンボジア5～6世紀の先クメール時代の出土資料が寄贈された。いずれも、列品の少ない考古分野の充実に寄与することとなった。 ○寄託 <ul style="list-style-type: none"> 12件の新規寄託があった。 絵画分野のうち東洋絵画では、中国・五代後晋時代・天福6年(941)の年紀をもつ「観音曼荼羅図」（重要文化財）、清時代の画家で写実的な花鳥表現を長崎に伝えた沈南蘋筆「海棠白頭翁・萱草小禽図」、また、現存作例が少ない韓国・朝鮮時代の「洞庭秋月・瀟湘夜雨図」があげられる。また、日本絵画では、安土桃山時代・16世紀の画壇の巨匠・狩野永徳が描いた「瀟湘八景図」、江戸時代・安永7年(1778)の年紀のある伝曾我蕭白筆「蘭亭曲水図」といった、中国に題材をとった対外交流に直結する作品を含む寄託を受けた。 書跡分野では、江戸時代前期の臨濟僧・雲居希膺が、中国・元時代の禅籍『緇門警訓』の一節を揮毫した「法語」の寄託を受けた。 彫刻分野では、室町時代16世紀の「木造十一面観音像」は、古代中世の大宰府の宗教的中心地・原山に伝わったことが明らかな仏像である。また、東洋彫刻では、中国・北魏時代の「銅像釈迦如来坐像」（重要文化財）があげられる。 寄託のうち、谷家関係資料が国の登録美術品に認定された関係で178件の寄託を解除し、2件の登録美術品として計上した。 									
 [寄贈品]金銅装単龍環頭柄頭									
 [寄贈品]青銅鈴釧									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
新規寄贈品件数		5件	—	—		4	1	3	4
寄託品件数		795件	—	—		1,297	1,219	1,238	1,081
うち新規寄託品件数		12件	—	—		50	17	30	15
登録美術品件数		2件	—	—		0	0	0	0
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 文化交流を主軸に据えた寄託品・寄贈品の受入を、分野のバランスよく行うことができた。特に館蔵品の少ない考古分野の優品の寄贈を受けることができた。							
【中期計画記載事項】		収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。							
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 文化交流を主軸に据えた寄託品・寄贈品の受入を、分野のバランスよく行うことができたため。							

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 1211

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(2)－1 収蔵品の管理・保存							
【年度計画】 収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。 (4館共通) 1) 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。 2) 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新する。 (東京国立博物館) 1) 収蔵品情報調査を継続して行う 2) 歴史資料・和書・古写真・ガラス乾板・館史資料等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入活用・公開するための作業を進める。								
担当部課	学芸研究部列品管理課 学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長 富田 淳 課長 神庭信幸					
【実績・成果】 (4館共通) 1) 寄託品の状態確認作業を行い、所在情報を更新した。また、寄託の継続について寄託者の確認をとった。 2) 本格修理のための列品調査、対応修理の実施、列品貸与の点検として1,721件の保存カルテを作成し、蓄積した。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新した。 (東京国立博物館) 1) 収蔵品情報調査を継続して行い、収蔵品データベースを更新した。 2) 旧資料部関係品を整理し、列品として26年度は506件の歴史資料を編入した。								
【補足事項】 (4館共通) 2) ・本格修理時334件、応急修理時692件、列品貸与時695件、合計1,721件の保存カルテを作成した。 ・『博物館資料の臨床保存学』武蔵野美術大学出版局を出版した。 ・臨床支援システムを用いた各種データの有効活用を行い、収蔵品の管理保存の実効性を向上させている。 (東京国立博物館) 1) 列品情報整備事業の6年目にあたる本年度は、黒田記念館所蔵品、歴史資料の分野を中心に調査を行った。26年度の調査件数は3,512件である。 ○ICタグを利用した列品移動情報システムを構築するための打合せ及び実験を行った。								
※保存カルテ作成件数の計数方法については、23年度より収蔵品及び寄託品のみを対象とし、特別展等の借用品における応急修理時の保存カルテ作成分は含まないものとした(22年度までは含む)。								
 列品移動情報システムの実験								
 出版『博物館資料の臨床保存学』								
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
保存カルテ作成件数 (23年度より計数方法変更)	1,721件	—	—		2,368	1,187	1,594	1,492
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 列品貸与、応急修理、本格修理などの業務を通じて資料の状態を観察し、保存カルテに記載した。業務の進捗に合致した蓄積と共有化を図ることができた。							
【中期計画記載事項】 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 従来から蓄積されつつある保存カルテによって、収蔵品に関する詳細な状態把握が可能になった。資料を確実に次世代に継承するための基本情報の整備が着実に進んでいる。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2) -1 収蔵品の管理・保存								
<p>【年度計画】</p> <p>収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。</p> <p>(4館共通)</p> <p>1) 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。</p> <p>2) 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館)</p> <p>1) 文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新する。</p>									
担当部課	学芸部列品管理室	事業責任者	室長 浅見龍介						
<p>【実績・成果】</p> <p>(4館共通)</p> <p>1) 年2回行う寄託品の継続手続きに合わせて、所在確認作業を実施した。</p> <p>2) 貸与に伴う点検時を主体として作成を行っている館蔵品の保存カルテの作成を継続して行い、204件作成した。 ・収蔵品の貸与記録及び館内の展示記録を継続して行った。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館)</p> <p>1) 購入品、寄贈品、新規寄託品等、文化財情報システムの収蔵品データを更新した。</p> <p>○彫刻の大型作品の写真撮影を行った。</p> <p>○仮設収蔵庫から新館収蔵庫へ各分野の作品移動を行った。</p> <p>○新規寄贈品・寄託品を中心に、収蔵庫搬入前に酸化エチレン製剤「エキヒュームS」による燻蒸庫燻蒸を実施した。</p>									
<p>【補足事項】</p> <p>○燻蒸庫燻蒸は、I PM(総合的有害生物管理)の一環として実施しており、文化財への安全性を検証するため、燻蒸中の温湿度調査や、燻蒸庫の点検なども行った。</p>									
									
大型彫刻の新館収蔵庫への移動作業									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
保存カルテ作成件数		204件	—	—		108	249	215	253
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】							
評価：B		新館収蔵庫への作品の移動を行い、作品の管理データを蓄積した。							
【中期計画記載事項】国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。									
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】							
評価：B		作品の写真・データを蓄積し、展示・研究等に繋げる基盤を作った。							

【書式A】

施設名 奈良国立博物館処理番号 1213

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2) -1収蔵品の管理・保存								
【年度計画】 収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。 (4館共通) 1) 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。 2) 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新する。 (奈良国立博物館) 1) 文化財保存修理所を円滑に運用して、文化財の積極的な保存修理を図る。									
担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長 谷口耕生						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 寄託品の所在確認 ・ 寄託品の移動時に、保存修理指導室及び列室への所定のフォームに基づく日時連絡を徹底した。 ・ 2ヶ月に1回実施している収蔵庫内環境チェック時、及び年末の収蔵庫査察時に寄託品の所在確認を行った。 2) 保存カルテの作成 ・ 保存カルテについては、文化財の個別写真が添付されたフォームに統一し、保存修理指導室で作成・保管するシステムの運用が軌道に乗ったことで、115件を順調に作成した。 ・ 保存カルテのコンディション評価欄に記入されたA～Eの5段階評価についてデータを集計し、館蔵・寄託品データベースに統合するための準備を進めた。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 収蔵品情報システムの運用を継続し、26年度新収品を含む収蔵品データを更新した。 (奈良国立博物館) 1) 文化財保存修理所の運用 ・ 学芸部と文化財保存修理所において、修理に従事する公益財団法人美術院、株式会社文化財保存、北村工房の3工房代表者との懇談会である文化財保存修理所協議会を26年9月11日及び27年3月5日に開催し、各工房の修理事業実施状況、修理所施設の維持・管理、工房内の温湿度をはじめとする保存環境改善に関する課題などを討議した。 ・ 館長以下博物館職員が定期的に文化財保存修理所各工房の修理実施状況を視察する修理所巡回を3回実施した。									
【補足事項】 ・ 26年12月23日から27年1月18日まで、当館西新館北第1室において保存修理指導室が中心となり準備した特集陳列「新たに修理された文化財」を開催し、前年度に文化財保存修理所各工房などで修理が完了した当館収蔵品・寄託品を修理解説パネルとともに展示(7件)することで、文化財修理技術を広く一般に理解してもらう機会とした。 ・ 文化財保存修理所の施設や事業の概要を紹介する日本語版と英語版の案内パンフレットを修理所内に設置した専用ラックに常備し、修理所公開や国内外の修理専門技術者による修理所視察などの機会に配布した。 ・ 27年1月15日に、21年から続く文化財保存修理所一般公開を開催し、修理所各工房の活動を広く知ってもらう機会とした。 ・ 27年1月27日から3月16日まで、当館西新館第1室において文化財保存修理所の各工房に協力を仰いで、特集展示「和紙－文化財を支える日本の紙」を開催し、文化財修理に用いられる和紙の重要性を紹介した。									
									
特集展示「和紙－文化財を支える日本の紙」 図録表紙									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
保存カルテ作成件数		115件	—	—		218	130	127	120
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財情報システムと連動して保存カルテの効率的な運用を計った。文化財保存修理所の各工房との連携を通じて、修理所の積極的な活用を行った。							
【中期計画記載事項】 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 保存カルテを順調に作成し、文化財保存修理所での修理につなげることができた。その成果を修理所公開や特集陳列「新たに修理された文化財」等で広く公開できた。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2)-1 収蔵品の管理・保存								
<p>【年度計画】</p> <p>収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。</p> <p>(4館共通)</p> <p>1) 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。</p> <p>2) 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (九州国立博物館)</p> <p>1) 博物館科学・保存修復諸室を計画的に運用し、文化財の適切な保存・積極的活用を図る。</p> <p>2) より充実した業務システムの構築を目指す。</p>									
担当部課	学芸部博物館科学課 学芸部文化財課	事業責任者	課長 今津節生 課長 富坂 賢						
<p>【実績・成果】</p> <p>(4館共通)</p> <p>1) 出品期間の更新または返却の時期に合わせて所在確認作業を行った。</p> <p>2) 収蔵品及び修理完了資料を中心とした保存カルテを75件作成した。 (九州国立博物館)</p> <p>1) 収蔵品・展示品を中心にX線CTスキャナ・3Dデジタイザ・3次元プリンタを用いて非接触で3次元データを取得し、保存状況と構造調査を実施した。測定結果をデータ化するとともに、3Dプリンタで出力した。このデジタルデータは文化財の保存に役立てると共に展示に反映した。また、保存修復施設1～6を運用し、計画的な保存修理事業を進めた。</p> <p>2) 現行システムの問題点を洗い出した結果を受け、新システムに向けた取り組みを行った。</p>									
<p>【補足事項】</p> <p>(4館共通)</p> <p>2) 保存カルテの作成は、修理完了作品の他、収蔵品の中から計画的に対象を選定して行っている。本年度は、修理完了作品と寄贈陶磁器の保存状況を調査し、カルテを作成した。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 長崎県鷹島海底遺跡から発見された元寇遺物の「てつはう」をX線CTでデータ化し、内容物である鉄片・陶器片をそれぞれ3次元データから製作して触れる複製品として展示した。また、同様にX線CTで3次元データ化した新潟県出土火焰土器を3Dプリンタで出力し、これを原型に陶器で製作した複製品を展示した。さらに、鹿児島県広田遺跡出土の貝製品を3Dデジタイザで3次元計測し、これを3Dプリンタで出力して触れる展示として活用した。</p>									
									
3Dプリンタで出力した鹿児島県広田遺跡出土の貝製品の展示風景									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
保存カルテ作成件数		75件	—	—	経年 変化	101	107	91	94
CTスキャン調査		64件	—	—		60	60	59	58
3次元計測		53件	—	—		58	55	34	43
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 保存状況と構造調査等を例年通り着実に実施することができた。							
【中期計画記載事項】国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財を永く次世代に伝えるため、保存・管理・調査等を例年通り着実に実施することができた。							

【書式A】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1221

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2)ー2 施設的环境整備								
【年度計画】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。 (4館共通) 1) 収蔵品の生物被害を防止するため、I P M (総合的有害生物管理) の徹底を図る。 (東京国立博物館) 1) 本館収蔵庫の整備計画を作成しつつ、既存収蔵庫のセキュリティ強化、環境改善の工事を実施する。 2) 収蔵品の保存と展示に関する環境について全館の視野にたつて調査研究を進め、環境データの解析・蓄積を行う。 3) 展示場及び収蔵庫における地震対策の再検討と改善を図る。 4) 収蔵庫、展示室の温湿度、汚染気体など保存環境に関する年次報告を整備する。 5) 輸送中の文化財に生じる振動及び衝撃に関する計測と調査を実施する。									
担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長 神庭信幸						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 収蔵庫など325地点における生物生息状況を夏季に調査した。また、ゴキブリなどの生活害虫を防除するため、夏季に防虫薬剤を全館に設置した。 (東京国立博物館) 1) 設備と収納を評価するための各項目を設定し、本館に存在する収蔵庫18箇所の収蔵実態について悉皆調査を実施した。調査によって収蔵庫全体の整備計画に必要な情報を収集、整理した。 2) 収蔵庫及び展示室など367地点の温湿度を計測し、環境の評価及び処置を実施した。空気環境に関しては、収蔵庫及び外気など11地点におけるアルデヒド類及び有機酸類などを計測し、蓄積した。 3) 平成館1階展示室改修工事に伴う新規導入免震台の加振実験を行い、免震効果を検証した。東洋館展示室に陳列する資料の支持具を新規製作し、地震対策を強化した。 4) 収蔵庫、展示室など258カ所の温湿度、及び11地点の空気汚染物質濃度に関し年次報告書を整備した。 5) クリーブランド美術館からの国際輸送、特別展「みちのくの仏像」、特別展「3.11大津波と文化財の再生」出品作品の国内輸送において、輸送中に発生する振動・衝撃の計測を実施した。									
【補足事項】									
									
免震台の加振実験									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
-		-	-	-		-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 生物生息、温湿度、輸送中の振動、免震装置の効果などに関する調査と検証を実施し、文化財を保存するための環境の整備に役立てた。							
【中期計画記載事項】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 展示、収蔵スペースの保存環境の質的向上を計画的に進めるため、各種の環境データの集積と解析によって、環境改善を効果的に進めることができた。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2)-2 施設的环境整備								
【年度計画】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。 (4館共通)1)収蔵品の生物被害を防止するため、I P M(総合的有害生物管理)の徹底を図る。 (京都国立博物館)1)平成知新館(新平常展示館)の講堂ほかの先行運用を開始し、9月に全館開館する。 2)平成知新館の開館までに、空調による調整開始前の空気環境、粉塵等の環境調査を行い、開館後の効率的な展示収蔵環境の維持管理に役立てる。 3)明治古都館(特別展示館、旧本館)の免震補強ほかの改修を前提として活用計画を策定する。 4)明治古都館の温湿度など、展示・保存環境に関わる調査研究を行う。									
担当部課	学芸部列品管理室 総務課	事業責任者	室長 浅見龍介 課長 植田義雄						
【実績・成果】(4館共通) 1)年間を通じて、収蔵庫での網羅的な昆虫類生息調査を行った。また、温湿度モニタリングを拡大した。日常清掃のための備品を拡充した。 (京都国立博物館) 1)25年度に展示製作工事が完了した平成知新館(新館)は枯らし期間を終えて26年9月13日より一般公開を開始し、初回展示「京へのいざない」は連日、1万人前後に上る多数の来館者を迎えたが、温湿度制御監視により適正な環境を維持した。 2)平成知新館では、空気環境目標が達成され、新しい展示ケースと収蔵庫については、収蔵・展示前に専門的な虫菌害調査と除塵清拭清掃を行った。 3)明治古都館(本館)免震補強ほかの準備として、保存活用計画報告書の原案を作成した。 4)明治古都館、東収蔵庫等では、温湿度モニタリングや昆虫類生息調査等に基づいた、効率的な環境維持を目指した。北収蔵庫の適切な空調運転体制の整備を図った。									
【補足事項】 ○保全業務・空調設備の予防的メンテナンスに努め、定期的な保守・点検、各種フィルターの適宜交換等を行い、展示室及び収蔵庫の温湿度環境の適正管理を目指した。 ・データロガー、毛髪温湿度計、中央監視値を併せた空調運転状況の監視体制を維持した。 ・電力事情を考慮し、外気温の変動に応じた温室度の設定変更を実施した。 ○展示室：明治古都館 ・展示室内及び展示ケース内の温湿度モニタリングを継続し、展示品の材質や保存状態、借用条件を考慮した環境監視体制を整え、気象や混雑状況による展示環境の変動等を継続して調査した。 ・展示室内の昆虫類生息調査は、監視スタッフと協力し、目視点検を中心に行った。 ・室内空間、床下部分、小屋裏部分の現地調査を実施した。また、『保存活用計画』に挿入する『価値評価報告書』の作成を京都工芸繊維大学、石田純一郎教授(近代建築史)に依頼した。 ○収蔵庫：特別展示館及び東収蔵庫等 ・データロガー等による温湿度モニタリングにより、空調設備の整備・点検・調整を適宜依頼することができた。 ・明治古都館と東収蔵庫にて昆虫類生息調査(インジケータ調査)を4回(明治古都館70、東収蔵庫90箇所)実施した。 ・北収蔵庫の使用を再開し、中央監視データとモニタリングデータの両方をもとに適切な運用方針の整備を図った。 ・清浄・清掃用品の充実によって簡易清掃が習慣となりつつあり、予防体制が強化されている。 ○平成知新館 ・収蔵庫・展示室の空気環境は目標値を全て達成した。 ・データロガー等による温湿度の計測を拡大し、「環境モニタリングシステム」の運用を開始した。これらのモニタリングの成果を、空調の制御や運転計画に役立てることができた。 ・展示ケースと収蔵庫・写場には、専門的な虫菌害調査と除塵清拭清掃を実施、安全性を確認した後、展示・収蔵・撮影を開始した。 ・展示室・収蔵庫にて昆虫類生息調査を(2回・延べ約320箇所)開始した。 ・展示室、収蔵庫のロック機構を取り外して免震装置を本稼働させた。 ・BEMS(ビルディングマネジメントシステム)のモニターを監視室以外に執務室にも配して活用した。									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
-		-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 平成知新館の環境を完全に整えて開館し、収蔵品・寄託品の移動を行うことができた。							
【中期計画記載事項】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。									
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 新館収蔵庫の管理システムを構築し、生物・カビの調査、気流調査を実施する等、順調に成果をあげた。							



展示ケースの除塵清拭清掃



BEMSの監視モニター

【書式A】

施設名 奈良国立博物館処理番号 1223

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2)ー2 施設的环境整備								
【年度計画】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。 (4館共通) 1) 収蔵品の生物被害を防止するため、I P M(総合的有害生物管理)の徹底を図る。 (奈良国立博物館) 1) 展示室及び展示ケースの温湿度管理について、無線LANによるデータ管理システムを更に充実させる。 2) 展示ケース内の温湿度・粉塵量などを継続的に計測し、ケースの調湿性能や気密性能の向上を図る。 3) 収蔵庫及び展示室の適正な温湿度管理の徹底を図る。									
担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長 谷口耕生						
【実績・成果】 (4館共通) 1) ・館内の文化財害虫生息状況を把握するため、文化財の保管及び展示にかかわる箇所を中心に、昆虫調査用トラップを2ヵ月に1回設置・回収し、調査結果の蓄積・分析を行った。 ・文化財害虫の生息が確認された展示室・展示ケースを中心に防虫シートの設置や殺虫処置を行い、併せて展示施設の周囲に害虫忌避剤を散布した。 ・収蔵庫周辺や展示室内、調査室内の衛生環境保持のため、掃除と防塵マット交換を定期的に行なった。 (奈良国立博物館) 1) 展示室及び展示ケース内の温湿度の管理をすることができる無線LANによるリアルタイムの温湿度管理システムにより、正倉院展のような多数の観覧者がもたらす展示室内の温湿度環境の変化に、科学的データを以て即時に対応した。 2) ・展覧会ごとに展示レイアウトに応じて無線LAN温湿度センサーを設置し、期間中に得られたデータを展示終了後に分析して報告書を作成した。 ・正倉院展終了直後の26年11月13日に、毎年継続的に実施している展示ケース内の粉塵調査を宮内庁正倉院事務所研究員とともにいった。 3) 展示室内の温湿度については無線LAN温湿度管理システムにより24時間リアルタイムで状況を把握した。収蔵庫及び文化財保存修理所各工房内については、ロガータイプの温湿度センサーによる監視を継続するとともに、定期的にデータの回収、分析を行うことによって温湿度の変化を把握した。									
【補足事項】 ・展示室・収蔵庫・文化財保存修理所内など館内150ヵ所に設置している文化財害虫調査用トラップを、学芸部研究員が当番制により2ヵ月に1回交換・回収し、回収したトラップは外部業者に委託して文化財害虫の捕獲数データを蓄積した。この調査データをもとに、害虫被害が懸念される箇所を中心に忌避対策及び殺虫処置を実施し、併せて害虫発生を防ぐための清掃による衛生環境の保持などI P Mの実践につなげた。 ・展示ケースの残留ガス(VOC)をチェックするため、外部機関に検査を依頼するとともに、館内でもバンプインジケータを利用した独自検査を実施した。 ・自動調湿装置を内蔵した免震ケースを使用し、気象条件や多数の観覧者など外的要因で展示室内の温湿度環境に変動が生じた場合でも、展示ケース内の温湿度を安定して好条件に保つことができた。									
									
展示ケース内に設置した文化財害虫用防虫シート									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年 変化	22	23	24	25
-		-	-	-		-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 無線LAN温湿度管理、文化財害虫調査用トラップの回収、展覧会の環境対応など、当初の計画通り実施できた。							
【中期計画記載事項】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 調査で得られたデータの解析が進みつつあり、保存・展示環境のよりよい構築が進みつつある。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承																										
事業名	(2)-2 施設的环境整備																										
【年度計画】																											
<p>展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。</p> <p>(4館共通)</p> <p>1) 収蔵品の生物被害を防止するため、I P M(総合的有害生物管理)の徹底を図る。 (九州国立博物館)</p> <p>1) 館内の温湿度・空気質など保存環境に関するデータを蓄積する。</p> <p>2) 全館的視野に立った陳列品の展示・保存環境に係る調査研究を進め、環境データの蓄積・解析を行う。</p>																											
担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 今津節生																								
【実績・成果】																											
<p>(4館共通)</p> <p>1) 収蔵品の生物被害を防止するため、I P Mの徹底を図った。文化財搬入に際し、I P Mメンテナンスに基づく収蔵準備作業を実施すると共に、必要に応じて殺虫殺菌処理を実施した。 (九州国立博物館)</p> <p>1) 展示室に新たな温湿度モニタリング装置を導入し、より確実な温湿度データの蓄積を図った。収蔵庫、諸室等館内約420カ所にトラップを設置し、虫の侵入を調査して保存環境の改善を行った。</p> <p>2) 収蔵庫にこれまでの温湿度データロガーとは別に、温湿度モニタリング装置を導入し、早期対策に努めた。 ・環境データを解析することで、海外より借用した文化財の安定した状態での展示に寄与することができた。</p>																											
【補足事項】																											
<ul style="list-style-type: none"> ・展示室にSDカードにデータを蓄積できる温湿度モニタリング装置を導入した。これによりデータの欠落をなくすることができるようになり、確実なデータ収集が可能となった。 ・収蔵庫でこれまで使用していた温湿度データロガーの老朽化に伴い、新たに温湿度モニタリング装置を導入し、精度の高い温湿度データの蓄積を図った。 ・温湿度データの管理、解析によって本年度も展示、収蔵環境をより安定させることができた。今後も安定を維持しつつ、より一層の効率化を図りながらエネルギーの削減に寄与したい。 ・収蔵庫、展示室、諸室等の約420カ所に常時粘着トラップを設置し年間を通して、2週間おきに定期的モニタリングを実施した。害虫侵入箇所と館内の害虫の生息状況を早期に発見対処する体制を維持した。 ・地元NPO法人やボランティア活動との連携に努め、文化財の適切な管理・保存について市民や地域の理解を深めた。展示室等一般来館者エリアの温湿度記録や粘着トラップの観察には、本年度も引き続き両者の協力を得た。 ・ミュージアムI P M研修や連絡会議を実施することにより、市民ボランティアやNPO法人等によるI P M活動へのさらなる指導をすすめることができた。 ・殺虫殺菌処置は、特別展やトピック展あるいはイベント用資料等借用や持ち込み資料についての対応である。内訳は二酸化炭素処置1件、低酸素法処置8件。 ・1階研修室(和室)で文化財害虫が確認されたが、生物モニタリングを継続して観察を進め、徹底的なメンテナンスによって被害拡大を未然に防ぐことができた。 																											
<table border="1"> <thead> <tr> <th>【定量的評価】項目</th> <th>26年度実績</th> <th>目標値</th> <th>評価</th> <th>経年変化</th> <th>22</th> <th>23</th> <th>24</th> <th>25</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>殺虫殺菌処置</td> <td>9件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td></td> <td>7</td> <td>6</td> <td>6</td> <td>10</td> </tr> </tbody> </table>										【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	殺虫殺菌処置	9件	—	—		7	6	6	10
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25																			
殺虫殺菌処置	9件	—	—		7	6	6	10																			
【年度計画に対する総合評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 温湿度計測に関して新たなモニタリング装置を導入してより確実なデータの集積を図った。I P M活動に関しては市民ボランティアや地元NPO法人と連携して進めることができた。																								
【中期計画記載事項】展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。																											
【中期計画に対する評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 新システムの導入(温湿度モニタリング装置)、地道な粘着トラップによる生息調査、環境のモニタリングにより、確かな環境整備を行うことができ順調である。中期計画の最終年度である次年度はこれまでの環境整備を見直し、次につながる環境整備システムを検討する。																								



地元NPO法人による収蔵庫前室兼通路のIPMメンテナンスの様子

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 1311-1

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)－1 収蔵品の修理 ①計画的な修理及びデータの蓄積								
<p>【年度計画】</p> <p>修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。</p> <p>(4館共通)</p> <p>1)文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから80件（東京：40、京都：10、奈良：9、九州21）の本格修理を実施する。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1)引き続き国宝・重要文化財の中長期修理計画を策定する。</p> <p>2)保存修復関係資料(前年度修理実施分)のデータベース化を図る。(70件)</p>									
担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長 神庭信幸						
<p>【実績・成果】</p> <p>(4館共通)</p> <p>1)紙本などの修理技術者として保存修復課に2名のアソシエイトフェローを配置し、館内で実施する館蔵品の本格修理、応急(対症)修理を本格化させた。作品の劣化予防のために413件の応急修理を実施し、緊急性の高いものから78件の本格修理を実施した。うち国宝2件、重要文化財1件、未指定品4件は寄附金による本格修理である。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1)修理計画立案に向け、国宝・重要文化財を含む305件の作品に関して修理仕様の検討を行い、中長期修理計画策定を進めた。</p> <p>2)データベース構築のために25年度に本格修理を実施した93件の内、修理が完了した61件の修理内容についてデジタル化を実施した。『東京国立博物館文化財修理報告書XV』を刊行した。</p>									
<p>【補足事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国宝「鷹見泉石像」(江戸時代)、「坪内老大人画稿」(江戸時代)、「坪内老大人像」(江戸時代)はバンク・オブ・アメリカからの寄附金により修理を開始し、継続して修理を行なった。 ・国宝「雪景山水図」(南宋時代)は増井久代氏からの寄附金により修理を引き続き行った(25年度着工)。 ・重文「放犢図」(元時代)、「大燈籠」(明治時代)、「河童形土偶」(縄文時代(中期)・前3000～前2000年)は飯田貞子氏からの寄附金により修理を開始した。 ・文化財保存修復学会第36回大会(26年6月7日、東京)において「被災文化財等救援活動における保存修理－キャンバス作品の脱塩の試み－」を発表した。 ・文化財保存修復学会第36回大会(26年6月8日、東京)において「博物館における修理技術者専門員の異議について－東京国立博物館の取り組みを例に」を発表した。 ・文化財保存修復学会第36回大会(26年6月7日、東京)において「国宝繪図屏風(東京国立博物館蔵)の修理事例－本紙裏面に遺されていた情報に着目して－」を発表した。 ・文化財保存修復学会第36回大会(26年6月7日、東京)において「染織品の展示方法における新案－東京国立博物館の展示例－」を発表した。 ・文化財保存修復学会第36回大会(26年6月7日、東京)において、「劣化で一部粉状化したガラス挟み法隆寺裂修理方法の一例－東京国立博物館所蔵作品の事例－」を発表した。 									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
修理件数(本格修理)		78件	40件	A	変化	139	106	95	93
文化財修理データベース化件数		86件	70件	A		98	114	83	84
【年度計画に対する総合評価】 評定：A		【判定根拠、課題と対応】 緊急性の高い本格修理及び応急修理、計画立案のための事前調査を計画的に実施し、厳しい経済的事情の中で国宝2件、重要文化財1件を含む修理を実施し、当初予定を上回る内容の成果を挙げた。合わせて修理関係資料のデータベース化を予定通り完了した。							
【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 事前調査、応急修理、本格修理の各段階で保存科学と修理技術が連携して保存修理事業に当たり、博物館活動に対して最適な作品修理を行うことができた。							

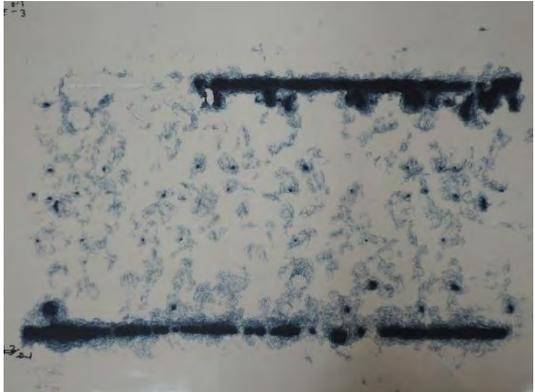


列品番号A-12087「坪内老大人画稿」の修理中検討会

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)-1 収蔵品の修理 ①計画的な修理及びデータの蓄積								
【年度計画】 修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。 (4館共通) 1) 文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから80件（東京：40、京都：10、奈良：9、九州21）の本格修理を実施する。 (京都国立博物館) 1) 中長期的修理計画の策定を検討する。 2) 収蔵品修理資料のデータベース化に向けた調査を開始する。									
担当部課	学芸部列品管理室 学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長 浅見龍介 室長 赤尾栄慶						
【実績・成果】 (4館共通) 1) ・館費による修理に加えて、館への寄附金による修理を1件新規で実施し、24年度より朝日新聞文化財団の修理助成にて継続して行われている修理を1件実施した。 ・絵画2件と漆工1件について、修理中に修理請負候補者選定委員による工程検査を行い、修理が適正に実施されているかを現場確認した。 ・本格修理実績 11件 内訳は絵画4件、金工1件、漆工1件、染織3件、考古1件、歴史資料1件 (京都国立博物館) 1) 中長期的修理計画の策定に向けて、確保できる財源についての検討を行い、昨年度に引き続いて各分野の作品担当と実施作品についての調整を行った。 2) 昨年度から引き続いて、収蔵品データベースの更新計画に修理情報の集積を盛り込むことを念頭に、必要項目の洗い出しとデータ状況の確認を行った。									
【補足事項】 (4館共通) 1) ・今年度は博物館の当初予算で割り当てられた以外に個人の篤志家からの寄附金により、重要文化財「紙本淡彩耕作図」久隅守景筆（6曲1双）の修理（3カ年約950万円）に着手した。当初予算が潤沢に確保できない中で、指定品の高額修理が実施できた意義は大きい。 ・24年度から継続して朝日新聞文化財団の助成による国宝「病草紙」（10面）の修理（4カ年約2000万円）を実施している。 ・修理請負候補者選定委員会に諮られる高額修理案件は、修理工部屋の企画競争により、さまざまな角度から意欲的な修理提案を受けることができた。例えば、その成果は「竹石図」詹仲和筆の表装についての修理方針に反映されている。 ・修理請負候補者選定委員会委員は前述の「紙本淡彩耕作図」と「竹石図」の絵画2件について、修理工程検査を27年1月に実施した。なお、昨年度実施した漆工の「花鳥蒔絵螺鈿筆筒」の工程検査について、今年度も継続して第2回目を27年1月に実施した。 ・今後の館蔵品の修理については、高額修理と少額修理を組み合わせ、外部資金の獲得を目指しながら弾力的に実施していきたい。 (京都国立博物館) 2) 文化財保存修理所では、本年度は113件の新規修理文化財の搬入がありデータベース化を行った。また、過去のデータに関して2,306回追加、更新を行った。									
									
竹石図 詹仲和筆									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
修理件数(本格修理)		11件	10件	B	9 106	10 118	13 93	15 101	
文化財修理データベース化件数		113件	—	—					
【年度計画に対する総合評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 今年度の修理件数は当初目標値の10件を超えており、懸案であった指定品の修理にも着手できた。						
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 緊急性の高い重要文化財の屏風作品の修理に着手しており、計画達成に向けて順調に成果を上げている。						

【書式A】

施設名 奈良国立博物館処理番号 1313-1

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3) -1 収蔵品の修理 ①計画的な修理及びデータの蓄積								
【年度計画】									
修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。 (4館共通)									
1)文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから80件（東京：40、京都：10、奈良：9、九州21）の本格修理を実施する。 (奈良国立博物館)									
1)引き続き修理の中長期的計画に基づき修理を実施する。									
2)修理資料のデータベース化を図る。									
3)寄託の継続を図る必要性の高い寄託品について修理を実施する。									
担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長 谷口耕生						
【実績・成果】									
(4館共通)									
1)・館蔵品修理10件（応急修理1件含む）のうち、新規7件、前年度からの継続事業3件を実施した。 内訳 絵画4件（※うち絹本着色六字経曼荼羅1件は2ヵ年継続事業の最終年度。絹本着色山越阿弥陀図1件は3ヵ年継続事業の1年目。紙本着色泣不動縁起及び絹本着色東大寺曼荼羅2件は2ヵ年継続事業の1年目。） 書跡1件 工芸2件（※うち国宝 刺繍釈迦説法図1件は4ヵ年継続事業の3年目） 考古資料3件（※うち二塚古墳出土鉄製品1件は2ヵ年事業の最終年度。） ・年度内に6件が完了した。 (奈良国立博物館)									
1)22年度に策定した館蔵品の長期修理計画に基づき、計画通りに館蔵品修理を実施している。									
2)前年度に引き続き、当館紀要『鹿園雑集』に「奈良国立博物館文化財保存修理所 修理一覧」の掲載作業を進めるとともに、併せて修理報告資料を整理し、データベース化を進めた。									
3)寄託品3件について当館の推薦による財団助成を受けて修理を実施した。									
【補足事項】									
<ul style="list-style-type: none"> 賛助会員や協賛企業からの寄附金を館蔵品修理費に使用する従来の規定に加えて、展示会場入り口に募金箱を設置して募った寄附金を収蔵品の修理費に使用する取扱要項を新たに策定し、これに基づいて前年度からの継続事業である刺繍釈迦説法図の国宝1件の修理を実施した。またこの寄附金による修理が平成25年度に完了した館蔵の絹本着色十王図及び絹本着色安東円恵像の重要文化財2件を、特集展示「新たに修理された文化財」で公開した。 寄託品修理については、出光文化福祉財団の助成による奈良・瀧上寺所蔵八高僧像修理、住友財団の助成による京都・真輪院所蔵星曼荼羅修理、朝日新聞文化財団の助成による黒漆箱型礼盤修理が新規着工した。 									
館蔵五苦章句経の補修紙作成									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
修理件数(本格修理)		9件	9件	B		9	11	9	8
文化財修理データベース化件数		77件	—	—	—	54	70	73	
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】							
評価：B		22年度に策定した館蔵品の長期修理計画に基づいて館蔵品の修理を実施するとともに、文化財保存修理所で行われた文化財修理のデータベース化を着実に実施した。							
【中期計画記載事項】		修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。							
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】							
評価：B		館蔵品、寄託品について長期計画に基づきながら修理を着実に実施することができた。修理に際しては、当館保存担当者が光学的調査を実施してその所見を修理仕様に反映するとともに、修理監督についても当館研究員が適宜行った。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)－1 収蔵品の修理 ①計画的な修理及びデータの蓄積								
【年度計画】									
修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。									
(4館共通)									
1)文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから80件（東京：40、京都：10、奈良：9、九州21）の本格修理を実施する。									
(九州国立博物館)									
1)博物館科学・保存修復諸室の積極的活用を図る。									
2)修理資料のデータベース化の調査を実施する。									
担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 今津節生						
【実績・成果】									
(4館共通)									
1)館所蔵品を中心に、展示や損傷の程度を勘案して、緊急性の高い文化財29件（本格修理23件、応急修理6件）を修理した。									
(九州国立博物館)									
1)九州をはじめとする館外所蔵者負担による文化財修理32件のために、当館の保存修復諸施設を積極的に活用した。館費による修理とあわせて61件の修理を実施した（施設内修理58件、施設外修理3件 合計61件）。このうち、九州の寺院に伝来した重要美術品・両界曼荼羅（奈良国立博物館所蔵）については、長期貸与を前提として3年間かけて当館経費で本格修理を行っている。この修理において奈良国立博物館の保存修理担当者と連携して調査を行い、修理を進めているところである。									
2)修理報告書及び修理経過を示す画像データを整理して、データベース化に備えた。									
【補足事項】									
(4館共通)									
1)館費による修理件数29件（本格23、応急6）									
（絵画12（うち本格9、応急3）、書跡2（うち本格2）、金工2（うち本格1、応急1）、陶磁1（うち本格1）、染織5（うち本格5）、考古6（うち本格4、応急2）、歴史資料1（うち本格1））									
(九州国立博物館)									
1)・修復施設1～3では、国宝修理装演師連盟が館所蔵品15件の他、国宝・琉球国王尚家関係資料の文書記録類（那覇市所蔵）や重要文化財・田能村竹田関係資料（大分市美術館所蔵）など、合計39件の修理を実施した。									
・修復施設4では、美術院が鹿児島県指定文化財・阿弥陀如来立像（光明禅寺所蔵）の修理を実施した。									
・修復施設5では、芸匠が館所蔵品4件の他、重要文化財広田遺跡出土品（南種子町）など、合計8件の修理を実施した。									
・修復施設6では、目白漆芸文化財研究所が2件の館所蔵品等の修理を実施した。また大西漆芸修復スタジオが、天草市指定文化財・燈など8件の修理を実施した。									
・修復施設外では、美術院が1件の仏像の修理を実施した。また目白漆芸文化財研究所が1件、大西漆芸修復スタジオが1件の修理を実施した。									
・修理に使用するための表具裂を2件新調したことに伴い、その表具裂データを作成した。									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
修理件数(本格修理)		23件	21件	B		19	19	20	17
文化財修理データベース化件数		—	—	—		—	—	—	—
修復施設の活用(補助事業等)		31件	—	—		23	19	22	29
表具裂データ		2件	—	—		9	0	0	10
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 館費による本格修理件数ならびに館外所蔵者負担による文化財修理件数は徐々に増加しており、年度計画を順調に達成していると判断できる。							
【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 機構の保存修復担当者と連携しながら修理を進めており、中期計画を順調に達成していると判断できる。							



修復施設3での修理風景
重要美術品・両界曼荼羅
(奈良国立博物館所蔵)

【書式A】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1311-2

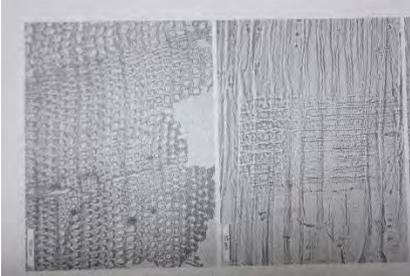
中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)-1 収蔵品の修理 ②科学的な技術を取り入れた修理								
【年度計画】 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。 (4館共通) 1)紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 2)修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、赤外線撮影、X線透過撮影、三次元蛍光分光分析などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 (東京国立博物館) 1) X線CTスキャナーを運用し研究の進展を図り、より適切な修理方法、展示、輸送に関する検討する。									
担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長 神庭信幸						
【実績・成果】(4館共通) 1)絵画、書跡などの本紙あるいは敷き紙などについて、植物繊維の同定を26件(A-11182 山水図 など)実施し、本紙の保存に関して検討を行った。 2)修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析140件、4573箇所(A-9972 鷹見泉石像など)、X線透過撮影 92件、172カット(H-3502 女乗物など)、赤外線撮影 3件(A-11182 林和靖図など)、三次元蛍光分光分析 12件、173箇所(A-9972 鷹見泉石像など)の科学的調査を実施した。これらの結果を構造調査と修理設計に役立てた。 (東京国立博物館) 1) 大型垂直式X線CTスキャナー、大型水平式X線CTスキャナー、微小部X線CTスキャナーなど3機種の本格運用を開始し、144件(TJ-1835 パシエリエンブタハのミイラなど)の撮影を行った。									
【補足事項】 ・東京国立博物館でもより深い文化財調査を行うべく、性能の違う3台のX線CTスキャナーを設置し、研究を開始した。 所蔵品の貸与前の点検時に亀裂等の確認を行うことで適切で安全な輸送方法の検討を行えるようになった。大型X線CTを用いた他の研究機関との共同による調査研究も進み、今後の研究の進展が期待できる。また、東日本大震災で被災した文化財の修理前調査を行い、適切な修理方法の設計、施工を行うことが出来た。									
 水平型X線CT撮影装置を用いた調査研究作業									
		大型垂直式X線断層撮影装置 Vertical CT	大型水平式X線断層撮影装置 Horizontal CT	微小部X線断層撮影装置 Precision CT					
									
マニ ブレ ータ	全体寸法	約5,400x 4,200x 4,300mm	約5,100x 2,800x 4,450mm	約2,500x 1,200x2,000mm					
	対象物 最大重量	500kg	100kg	25kg					
	テーブル サイズ	φ2,500mm/φ1,200mm	長さx幅:3,000mm x 920mm (複合 素材製)	φ450mm					
検出 器	ラインセンサー(LDA) Y.LineScan 250-16-100 ピッチ: 254 μm, 4,030 素子 耐電圧:600kV		フラットパネル検出器 Y.XRD1621 AN15 ES"premium"有効画素数:1,024x1,024 2,048x2,048						
線源	X線発生 装置	管電圧:20kV-600kV 最大管電流2.5 mA、焦点寸法:準 拠 EN 12543:1.0mm/0.4 mm	管電圧:20kV-600kV 最大管電流2.5 mA、焦点寸法:準 拠 EN 12543:1.0 mm/0.5 mm	管電圧 10 kV-225kV, 最大管電流3.0mA 最大出力320/64 W,最小焦点寸法 <6μm、最小識別度<3μm					
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
【年度計画に対する総合評価】 評定:B		【判定根拠、課題と対応】蛍光X線分析、赤外線撮影、X線透過撮影など従来から運用している分析方法に加え、X線CTスキャナーの導入により多面的に文化財の内部構造あるいは状態を確認することが可能になり、本格修理や調査研究に対して精度の高い基礎情報を提供できた。							
【中期計画記載事項】		修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。							
【中期計画に対する評価】 評定:B		【判定根拠、課題と対応】東日本大震災で被災した文化財の修理のための事前調査を始めとして、各種の文化財の保存状態確認のための調査を修理技術者、学芸研究者らと共に実施し、具体的な修理の仕様策定に結びつけることができた。							

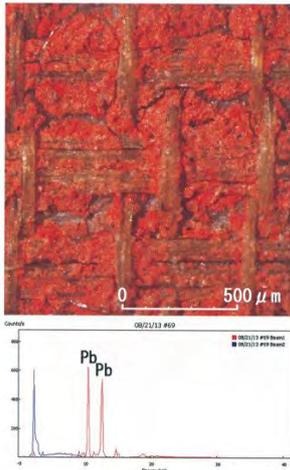
中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)-1 収蔵品の修理 ②科学的な技術を取り入れた修理								
【年度計画】 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。 (4館共通) 1) 紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 2) 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、X線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 (京都国立博物館) 1) 文化財材質分析システム等を整備する。									
担当部課	学芸部 学芸部 学芸部	事業責任者	部長 松本伸之 上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶 列品管理室長 浅見龍介						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 24年度より朝日新聞文化財団の助成にて修理を継続している国宝「病草紙」について、本紙の裏面に接着する肌裏紙の分析（明度・色目・紙厚・簀目）を行い、修理完成にむけた指針の策定に役立てた。 2) 25年度に設置したマイクロフォーカスX線CTシステムの運用を開始し、文化財の調査を行った結果、内部構造の解明、修理に資することが出来た。 (京都国立博物館) 1) 電子顕微鏡システム、3Dプリンター、蛍光X線分析装置などの機器を新たに調達した。									
【補足事項】 (4館共通) 1) 国宝「病草紙」については、肌裏紙の分析を行った結果、修理前に用いられていたものよりも、明るい色目を採用することで、文化財に対する安全性の確保とあわせ、公開における観賞性を高めることを目指した。 2) ・運用を開始したマイクロフォーカスX線CTシステムについては、重要文化財「十二神将立像」（静嘉堂文庫蔵）、 「地藏菩薩立像」（法性寺蔵）、重要文化財「白光神立像」（高山寺蔵）、重要文化財「蘭溪道隆坐像」（建長寺蔵）、 重要文化財「薬師如来坐像」（神護寺蔵）で調査を行ったところ、立体的に見ることによって初めて判明する内部構造に関する有益な情報を得ることができた。 ・これらの情報は、実際に行われている修理のみならず、将来的な修理、あるいは立体を中心とした文化財の取り扱いなどにも益するものである。 (京都国立博物館) 1) ・26年度は、電子顕微鏡システム、コンピューテッドラジオグラフィ、蛍光X線分析装置、3Dプリンター、赤外線撮影用カメラレンズ、工業用内視鏡、イメージングプレートを新たに調達した。 ・27年度は、諸調査が効率的かつ安全に実施することのできる機器を継続して調達し、導入した機器の運用を随時開始する予定である。									
									
		マイクロフォーカスX線CTシステムによる撮影			工業用内視鏡を用いた仏像の調査（デモ）				
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
科学的調査		6件	—	—		—	—	1	1
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 分析機器の整備を進め、科学的な手法を取り入れるための基礎を整えることができた。							
【中期計画記載事項】		修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。							
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 科学的な手法を加味した、より精度の高い保存修理の実現に向け、順調に成果を上げている。							

【書式A】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1313-2

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)－1 収蔵品の修理 ②科学的な技術を取り入れた修理								
【年度計画】 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。 (4館共通)1) 紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 2) 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、X線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 (奈良国立博物館) 1) 木造文化財について、木材樹種同定の調査を行い、文化財の材料の解明及び修理指針の検討に役立てる。 2) 古墳出土の甲冑片、武具等鉄製品、木造彫刻などのX線撮影及び実測図作成を順次進め、材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。									
担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長 谷口耕生						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 紺紙金地五苦章句経の修理に際して料紙の繊維分析を実施し、補紙として用いる紙の仕様を決定した。(実施回数1回) 2) ・小野流相承絵系図の修理に際し、当館光学調査室の機器を用いて顔料の蛍光X線分析を実施した。(実施回数2回) ・花鳥蒔絵螺鈿櫃(阪急文化財団蔵)の修理に際し、当館研究員がX線透過撮影を実施し、蝶番金具の固定に関する調査を行った。(実施回数4回) (奈良国立博物館) 1) 当館文化財保存修理所で修理施工された木造彫刻作品11件について、京都大学生存圏研究所に委託して樹種同定調査を実施し、その成果を当館研究紀要『鹿園雑集』に掲載した。 2) 古墳出土の鉄器を中心とする館蔵考古資料の修理に際し、X線透過撮影を実施し、修理方針の決定に役立てた。									
【補足事項】 ・文化財保存修理所各工房が当館館蔵・寄託品を修理するに際して文化財調査を学芸部研究員と共同で実施し、データの収集・共有化に努めた。また同調査を円滑に進めるために当館の備品である光学機器(高精細デジタルカメラ、近赤外線カメラ、X線透過撮影装置)や蛍光X線分析装置を積極的に利用した。									
									
木造彫刻の樹種同定結果の例									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
光学的調査		7回	—	—		—	—	—	9
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財の修理に際し、光学的調査を連携して随時行うことで、修理の指針に役立てることができた。							
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 携帯型蛍光X線分析装置を導入し、修理現場で光学的調査を随時実施する体制が整いつつある。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(3)-1 収蔵品の修理 ②科学的な技術を取り入れた修理							
【年度計画】 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。 (4館共通) 1) 紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 2) 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、X線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。								
担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 今津節生					
【実績・成果】 (4館共通) 1) 当館所蔵国宝栄花物語及び重要文化財布袋図等の紙本作品9件について繊維同定を行った。 2) 当館所蔵物語図屏風(A75)について、現状二曲屏風であるが、表現や本紙の状況から度重なる改装が行われていることが予想されたため、絵の具の顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った。その結果、予想された改装順序に矛盾が無いことが判明した。 ・当館所蔵朱漆螺鈿二層(ME1)については近代の作品であったため、使用されている赤色着色材料が有機化合物である可能性も考慮しX線回折分析を行った。その結果、着色材料は無機化合物である朱(HgS)であることが明らかになった。 ・前年度調査を行った当館所蔵仏涅槃図命尊筆(A74)の裏彩色に用いられた彩色材料の調査結果について、修理完成記念特別公開も兼ねた当館トピック展示「大涅槃展」でパネルを用いて展示するとともに、展示図録にも掲載し、一般の方々へ修理に伴う科学調査の必要性を伝えることができた。								
【補足事項】 ・各種最新の分析機器を備えた博物館内に修復施設が設置されている特色を生かし、絵画、書跡、歴史資料、漆工、彫刻などの各専門分野を持つ研究者と修理技術者、文化財科学専門の研究員の3者が共同で修理作品の調査、検討を行い、最善の修理を行うことができた。 ・例えば、文化財科学専門の研究者は、【実績・成果】に記したように多くの調査を実施した。このことにより、作品の材質や技法、構造を詳しく知ることが可能となり、安全かつ適切な修理の実施に役立つことが非常に大きかった。さらに、今回のように、修理時にしかできない科学調査の結果を、展示や図録を通して一般の方々にも周知できたことは、非常に大きな成果である。 ・また、それぞれの専門を持つ研究者と協議しながら修理を進めることができたので、各作品の特色を踏まえ、取り扱いや保管、展示についても十分に考慮した修理ができた。 ・このように、館内で打ち合わせを密にしながら修理を進められる環境にあることが、有意義であった。 ・当館所蔵国宝栄花物語等の紙本作品9件及び物語図屏風、朱漆花鳥草樹螺鈿二層、仏涅槃図命尊筆について、計12件の科学的調査を実施した。								
 <p>橙色の粒子が認められる。鉛(Pb)のピークが特徴的である。鉛を含む橙色顔料としては鉛丹(ミノウム、Pb_3O_4)がよく知られている。</p>								
トピック展示「大涅槃展」展示図録に掲載された当館所蔵仏涅槃図命尊筆の裏彩色の科学調査結果(一例)								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
科学的調査	12件	—	—		7	24	11	10
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 紙本文化財の繊維同定を行うことによって適切な補修紙の作成を行うことができた。また、文化財の修理履歴について、目視だけに頼っていたものをより客観的に判断することができた。以上から年度計画を順調に達成していると判断できる。							
【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 科学調査の件数も毎年10件前後と安定しており、中期計画を順調に達成していると判断できる。							

【書式A】

施設名

京都・奈良・九州国立博物館

処理番号

1320

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)-2 国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実に努める。								
【年度計画】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) 1)文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行う。 (京都国立博物館) 1)文化財保存修理所の改修工事を行う。									
担当部課	京都国立博物館総務課 奈良国立博物館総務課 九州国立博物館学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 植田義雄 課長 中村 恵 課長 今津節生						
【実績・成果】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) 1)・京都国立博物館の文化財保存修理所の空調機を点検し、空調機内の中性能フィルターを一部の空調機で交換した。 ・奈良国立博物館の文化財保存修理所の空調機を点検し、空調機内のプレフィルター及び活性炭フィルターを一部の空調機で交換した。 ・九州国立博物館の保存修復施設について、室内温湿度環境の改善の検討を行った。 ・九州国立博物館の保存修復施設において、修理件数の増加に伴い、修復収蔵庫内の既存木製棚に棚板を増段した。 ・九州国立博物館の保存修復施設では、近年、古文書や歴史資料等の大量一括紙文化財の修理事業が年々増加してきており、将来的に修復施設が手狭になることが予想されるため、外部専門家を交えて空調や修復作業の安全性等を考慮した中二階増設のための検討を行った。 (京都国立博物館) 1) 文化財保存修理所改修工事（一期工事）を完了した。また、電気設備及び機械設備の改修工事に着手した。									
【補足事項】									
									
クラック補修後、外装タイル張替 (京博)			アスファルト防水改修後の屋上 (京博)			躯体の内断熱後の修理室内部 (京博)			
(九州国立博物館) ・保存修復施設内の温室度環境をより安定的に維持し、安全に修復作業を行えるようにするため、保存修復施設外周部のダブルスキン化について検討を行った。									
			増段した修復収蔵庫内の木製棚(九博)						
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 3館とも文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行い、必要に応じて改善を実施しており、年度計画を達成している。京都国立博物館文化財保存修理所の改修工事も順調に進行している。								
【中期計画記載事項】国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実に努める。									
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 京都国立博物館文化財保存修理所の大規模修理を行うなど、中期計画を順調に達成している。								

